
白

金銀灰色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白

【コード】

N2199F

【作者名】

金銀灰色

【あらすじ】

意味もないといえはそう、でもきつと意味がある。∴灰色作品。

(前書き)

暗いです。暗いというか、訳わかんないです。
解釈は読者様にまかせます。

白だった。

周りにあるのはただの白だった。空が白く本当に存在しているかもわからない。白い地面があり、そこから生えている物も白かった。陰影すらない。よくよく見れば太陽も白かった。本当は太陽なんて無いのかもしれない。

白い道に居た。道はずっと続いていた。後ろにも前にも長かった。真ん中に突っ立っていた。道の横にはたくさん木があった。

いつからここにいたのか解からない。わからないからどう行動すればいいのかわからない。

とりあえず歩いてみる事にした。なんでかなんてわからないけど。

ふわふわと白い蝶が飛んでいた。白い花に止まった。

かなり上空を白い鳥が飛んでいた。白い空に隠れた。

皆同じ色をしていた。だからよく目を凝らさないと見えないくらい。でもそれが見えないと何も無い。ここは何も無い。何も無いから探して物を見つける。

いままでそうしてきた様に、でもこの記憶なんてないのに。

一歩一歩踏みしめるように歩いた。白い土がシャリシャリと心地よい音を立てた。なんだか不思議と気分が良かった。

鼻歌なんて歌おうかと思って、歩くと横の木々の間から子供が出てきた。2人。どちらも真っ白だった。服も腕も足も顔も眼もなにもかも。そして2人はそっくりだった。

君たちは誰？ そっくりだね

訊いてみて2人は不思議そうに首をかしげた。
お互いに顔を見合わせて、右の子が言った。

そっくりじゃないよ

よくよく見れば2人は左右対称の鏡のような姿だった。服はもちろ
ん身体も全部。

なんでだろうか、首を傾げれば左の子が

交換したの

向こうの方が綺麗なの

交互に言葉を発していく。

不思議な感覚。でも怖いとはなぜか思えない。

交換するの

でも半分こなの

だからもう交換できないの

もういつしよになっちゃったから

交換したらいつしよじゃないの

ねー、と2人顔を見合わせて言う。それは本当に子供らしい行動。
同時に言ってクスクス笑う。2人いつしよに。

でも次はどうしよう

左の子の言葉に、右の子は思いついた様に。
悪戯っ子のように、自慢したがりの子供のように。

まだ交換してないのあるよ

そっかじゃあそれ交換して終わりだね

そう言つて両方頭に手を当てた。ちがう、手じゃない。手に握られた銃の様な物。
引き金。

ドンッ

白色だった。倒れた2人も頭から流れ出る体液もバラバラになって弾けとんだ中身も。
地に液体が流れ出て、吸い込まれる様に消えた。同じ白色だからあるのか無いのかわからない。気が付けば身体も見えなくなっていた。

白で紛れたのか消えたのか。
仕方なくまた歩き始めた。

ケタケタケタケタ…

笑い声に聞こえた。笑い声が聞こえた。
耳を塞いでも聞こえるままだと無視した。

一歩一歩踏みしめるように歩いた。白い土がジャリジャリとどこか湿った音を立てた。なんだか不思議と早く先に行きたかった。走り出そうとして、木々の間から白い女性が現れた。1人。白いワンピースを着ていた。

こんにちは

立ち止まって挨拶をすれば、その人は軽く頭を下げた。白いローブが揺れた。

その奥に見えた顔にどこか見覚えがあった。でも思い出せない。

すみませんどこかでお会いしたことありますか？

言えば、彼女は笑う。

彼女も言う。

いいえ会ったことはありませんしかし知ってはいます

緩やかに、時のような声でやさしく言った。

聞いたことあることだけはわかるって事

何故

覚えていませんか？

彼女は言って、少し悲しそうな表情を見せた後

頭に手を当てた。いや手じゃないその先に握られた物

こうしたら思い出してくれますか

ド
ン

やっぱり白だった。白いロープの下から白い顔の半分が見えていて
白い液体が出ていて白い地面に倒れて白い風景だった。

白に紛れて見失った。身体が倒れていたのはもう見えない。

また歩き出す事にした

ケタケタケタケタ…

さあ、どうしようそうしよう先に進もう。

先ってどこさ、知らないけど。

一歩一歩踏みしめるように歩いた。白い土がぐしゃぐしゃと泥を踏んだような音を立てた。気分悪くて走り出した。

走ってる自分の前に立ちはだかる様に色んなヒトが出てきた。色々な服装をしているであろう皆白かった。

1人が何か言いかけて、誰かに撃たれて。もう1人言いかけて。

ドン

ドン

白だった。たくさんいても白だった。1人1人白だった。
折り重なるように倒れて全員倒れて白に紛れて見えなくなった。
皆気にしないで歩く事にした。

笑い声が聞こえない。

建物らしき所に着いた。適当に中を歩いて変な部屋に着いた。真っ
白だった。

でも1つ、黒

浮かんでいるようにも吊り下げられてるようにも壁に付けられてる
ようにも置かれてるようにも見えた。距離感わからずとりあえず
触れた。

まあいいそれは周りがかたいガラスか何かのようで、その中に黒が
入っている感じがした。

つるつるとした表面に触れて、少し心が和らいだきがして、ほんの
少し力を強くすればそれは柔らかい物に変わって

黒が溢れ出た。

黒だった。

周りにはあるのはただの黒だった。天井が黒く本当に存在しているかもわからない。黒い床があり、そこから生えている壁も黒かった。陰影すらない。よくよく見れば電球も黒かった。本当は明かりなんて無いのかもしれない。

黒すぎて今度もよく居場所がわからない。

手を伸ばせばそこにさっきのまあるい球があった。触れて、よく見てわかったのはそれが白だった事。白い球に入れられてた黒なら周りに透けるはずなのに球自体は白だった。

扉を出て、廊下をわたって。今まで来た道引き返す。

広い広い大きな階段を降りて、また外に出た。外も黒だった。

来た道引き返す。元の場所に戻って何しようか考えながら歩いてく。

森の真ん中うつすら見える道のようなところ通って帰る。途中何かに足が触れたが捜せば何も見えない。

あるいて、歩いて。またこつんと足に何か当たった。

今度はまだそこにあるままだったので持っていた球を掲げて近づけた。それ自体は光っているわけで白いのではないのにそうすれば見える気がした。

どこにあるのか見えないので球をだいたいの方に持っていく。こつ

ん、なにかに球が触れて。

球が黒くなった。

黒が球になった。

黒は球に吸い込まれて、球は黒色を透かして見せる。黒い球の出来上がり。

元々球に入っていた黒だから、すっぱり全部入ったみたい。周りはこれで前の白かと見れば、球の半分は白。そう、勾玉ってこんなかんじ。

じゃあ周りの白は、見てみてびっくり周りはいろんな色。空は青いし地は茶色いし、草は緑で綺麗な蝶が綺麗な花に止まった。

ああよかった色がいっぱい。じゃあさっきぶつかったアレは

足元は赤

ぐしゃぐしゃぬかるんでたアレはこの赤い液体の所為。

足元蹴ったのは最初に出会った2人の子。

そうだ、さっきこの子は銃で頭を撃って

自分の身体は何色だろう。

2人を埋葬した後ふいに思った。そういえば周りを見るばかりでまったく自分を知っていない。

ちよっぴりわくわくしながら自分の姿が映るものを探す。そっぴりや向こうの方で水音。水に映して見れないだろうか。

森の中歩いて湖発見。綺麗なそこに自分を映す。

赤

赤く汚れていた。

元々赤なのかと疑ってしまうぐらい赤色

そしてそれは、どうみても返り血

そっぴりなにか忘れていた何を忘れた自分を忘れた自分の

過去

そつだ思い出したよおもいださないうようにしてたよみえないようにしてたよ黒で塗りたいくって白で消そうとして重ねて隠したよ赤

あの引き金ひいたのはみんなじゃなくて

白。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2199f/>

白

2010年11月15日07時30分発行